

朝夷巡嶋記

第二編

卷三

13  
704  
8





門  
號  
卷



東明源謙校考幣餘事白紙朝朝文房賞儀家必用之書也

題画詩剛全二冊一題再詩選全壹冊

美疑先生撰輯  
書畫比白宜白紙朝朝常用摺懷中本全第一冊

書家必用の小冊諸君子常小案上の備置ありて  
其用本和相をから詩題面紙と絶句  
聯句六更あり數字和詩題面紙と絶句  
其有在と得和可和習小冊あり

書肆 大阪北久寶寺町心齋橋 前川源七郎梓

明治三六年  
十月九日  
購

朝夷巡嶋記全傳第二編卷之三

東都 曲亭主人編輯

初輯第十五

悪を罰と劔の山麓  
善小慶の百田の宿

却説その夜よ。朝夷三郎義秀へ根め笠平小竹典を早は。劔乃  
山麓へと赴む。廿四日の月つきのやぶやぶ生なる鳥夜やる悪棍あくこんホホままと  
ととあらんらんとと。蕉火を把とせせむむ件くだんの小厮こめ月来日つき来日つき熟まる路みちるられれ。  
物ものとも思おもふ。郷導きょうどうをまたた宿しゆく小義秀こぎしゆここまま呼よけけと。その行程こうりやうをたりり。  
見え見えああどど肩かたをかかえ劔岳けんがくの麓へふもと三里さんりああららももゆゆ久く又また一條いちじょうの捷徑せつてい  
あり。みちの程難ほど所ところるらととも二里にりああららるる近ちかくくいいづづの路みちより赴む死しぬぬ。  
と問とふふとといいふふ。これこれははととよよ。とといいふふ途みちの峻岨しんしんをたりりてて迎むかへへとといいふふ。

朝夷巡嶋記全傳第二編卷之三



急くと將大せ根め莖平ころる果と。捷徑よまぞ進まける。現は途ハ難哉  
 ると。この後と。と急ぎいふその夜子の比及小劔の山麓ちくちく  
 振鬲瞻れば天色出づる月のけりひせり。當下根助莖平ハ道次ハ竹輿と  
 ちろろ客人この如より山の主が宿所へハ二四町の間あり。原ハ慈航寺といふ  
 山寺より。近属類廢く住持あり。よまて彼魔平太ホハ老僧道人と逐  
 ちくこの廢院ハ落草たす。客敷いも破損せざる其如小住ひいとい  
 ある人の中より路ハ直まは迷せぬべしとあり。こゝめく暇多るれは  
 といふ小義秀うち点灯して入るや安うり。和連ハ且く樹下ハ休ひて暗号を  
 ちろろ後る月おそし。とく他所へ退るハ越度る人と敬言と二人の小厨を  
 唯こ上心く竹輿ハ扛よせて草折布て坐を占り。義秀ハ只此と彼慈航  
 寺み来て見まは月傾え牆破きて。鎖せども甲斐ある。溝埋と橋をちく  
 卻渡易う。その為体夜目るまは不定うめいんえねども。如く小樹立ちありて昔  
 由緒ある梵刹とおぼし。破牆の裾潜入りく人を方へと進む程ハ本堂経堂  
 の餘波もや。柱石のまうは又跌とて歩次運。枳の色うち遠まは前面小  
 ねとて。佛舎あり。人の泣声入る。秋るは暑を比るれば。兩戸  
 みるより。放り燈燭いと明々。庭の芳宜を木香みく。同ちくあせま  
 爾窺まは。座席の中央いと大なる。粗極瓦机のてく推直。唯妍  
 する一個の處女をこそ。上小推伏く。悪鬼又筆の。暴漢拾子織乃浴衣ハ  
 圓枯の帯。まふ結び。緋の統鼻禪の垂を。處女が黒髪ひかま  
 へく。右小削肉の庖刀を閃。女郎才いふ本夏を。汝が。うら  
 靡せん。と。人ハ。辭優く。甲夜よ。機嫌を。せも。隨ぬとて許  
 さん。否る。この肉刀を。曾と。臍と。孔穿融。囊環よ

月夜二編卷三







此一室の三方板壁もくもく二枚の門扇あり。中社あり。外面より戸を推  
 開く庖厨小赴き春白の上へ米三俵積のけりけり。然し究竟とてりて  
 白の縁小西の灸くけ。宙小釣く徐中小件の戸口小引提す。白と信入はひ  
 うけと肉よと用ぬ中うと拵この白の寺の物炊米の究めて莊客の感  
 掠奪しるる入露の命根撃んとく掠米ハ又さふ命反縮る塵となつ因  
 果觀面春白の響の物不應まる如。中ぞとひきせんとさふのさ彼知  
 るる友鶴の人心りるし。折りて来一花さるる。氣るるも散らせ。さう  
 彼奴ホと一方を結果人と壯夫。刀の鞘釘湿をど真なる声を下る。あて  
 技歩さう進み入る。息懸るるる友鶴の呵嘖とて。刀のよるる。辱め受入  
 上ととく死むと。さし。根をのめ。声を激。穢や山の主刀をわく。逼るる。中  
 山賊前徑の佯達小阿容とと力を任せんや。活と死と。ささぶと。く。及ぬ恋と

志とるる。あやう。あつ。思んとく。殺せと罵。魔平太。と。友のあ。合。さる  
 頭響をり。下。せ。眼結る。眼の光り。長庚の如耀。魔風小。息。吹。死  
 一寸。試。刀。切。み。さ。る。の。め。も。や。と。哮。と。ね。ひ。く。袖。あ。揚。げ。観。念。せ。よ。と。閃。を  
 刃の光り。め。ろ。共。小。後。方。小。掛。る。敗。簾。を。か。る。る。と。落。し。と。く。入。る。義。秀。の  
 あ。ら。る。の。燕。雀。と。個。む。丸。か。り。と。く。魔。平。太。が。右。の。腕。を。推。ご。る。と。ふ。丁。と。命。を。と。ち  
 驚。え。る。る。振。え。と。こ。る。と。く。推。系。奴。が。子。料理。の。め。ま。う。さ。ふ。命。の。相  
 伴。さ。小。出。さ。う。致。と。の。せ。と。果。を。冷。笑。ひ。鳴。手。が。ま。や。偷。見。と。も。遠。れ。の。の。音  
 小。ゆ。の。人。近。え。へ。今。宵。目。前。に。か。面。相。を。禮。拜。し。と。立。山。地。獄。へ。の。せ。と。劍。の。岳。の  
 土。産。し。せ。よ。安。房。國。と。く。下。刀。小。六。人。の。仇。と。頸。刎。下。野。ま。へ。大。船。の。帆。柱。を。さ。さ。と  
 毒蛇を殺せ。大儲の浮浪人朝夷三郎平朝臣義秀。さ。く。が。支。え。一。樹。の



陰も寄宿の恩人百田阿爺小相禪と其の愛女友鶴を救人のため迎せり。  
 頂を洗うる刃を受よと声高き罵れ魔平太はあきなく怒り敢て同  
 答せど。あき放さんと跳けども右の腕へ脛迄く半身既に枯る如く顔色  
 さへ小蒼然たり。この勢ひ小酒醒る悪棍們を騒ぐのこ有敷小近く進  
 るぞ衆声掛け力を副と魔平太こま激されん辛く珍放ち刃を  
 左小とると直と跳揚と突懸と義秀を身を反て刃を礮と打流し  
 怯む処項髪脛と棋のどく搦轉し左の横臂をさし伸つ友鶴を扶お流  
 しく膝布する魔平太を彼組板不脛のやと仰さあみて動せざ肉刀の  
 刃尖晃ことその宵月前衝ぎ且赤熊太水六沼太郎中太ホ八人保とれ  
 いのまひく度矢失ひ半弓をひふれども箭を幾とも能りぞ難刀を小  
 脛おきととも掛人とや人擬勢るく呆果るをわらうそのと死義秀ハ

おどき惑ひく立はもる女輩を見えまき察する所汝亦も思各まてこ小を  
 めるるんその處女を勅り杖と退れてこま侯親里へはゆきまて。おそれ處  
 女を勅らざらざ決りと許まてはとくといそぐ立是吞せよと腰お著る  
 茶籠と投与れが婦女輩へ鉄ひく友鶴を扶掖き庖偏のうへえまてを流る  
 義秀のこまを目送り快愉よりち笑ひ肉刀の背り、魔平太が頭を礮と打  
 敵き心賊甚麼多ひまや。年来人の五穀を盗く飽まぞ小食ひ悪報金錢衣  
 裳取掠りて煖衣なる悪報人を後罪るを殺しとこちよとせり悪報美女  
 少手を弄畧て刃の樂ととる悪報法師を逐ひ精舎を撤してあが樓家と  
 なる悪報五逆忽地報ひおく十悪肉組小集まぬ天罰國罰今ほて刃を  
 屠らるも遅うまやと罵責て突まくる刃を些し引揚く宵へごとと刺立  
 まハ苦と叫ぶ声の下小鮮血と瀆り刃尖るく組板の真中切て貫る赤熊



敵のまき



いりの木太

おひか



友つゆ

善秀の身  
単身  
魔平太

山の主人平太

山の中



太ホハその首領を奪まてくろく久操後まきき箭種造と射くとまよひみく半  
 弓より引く切て殺せと勝る折みあま化箭入後秀治うと組板を推立て  
 背はつ右子のうふ飛来る箭矢宙小懸て投え廿八前小立る水六も頼き見  
 あり打傷ま甚と叫びく弓を捨仰る小仆まろ悪棍們この為侍小碎易  
 ちくちやく知後秀入こと嘔と組板をあり廻し串き苗する麻鬼平太が死骸めろ  
 共投つと立並る支黨の悪棍三人打倒さし腦蓋を破とく一人へ即死し二  
 人へ髑髏腕骨うち碎まて生元をまきと云かるしと赤熊太中太逃人とこゆ小  
 義秀へ俱利伽羅の大刀引抜て透間もろく替く蒐ま六悪棍們も板合せ推と  
 籠と移入とまそのと死義秀憤然と眼み腫じ席を蹴立て又勢を敵  
 小のりともせ前小進も亦熊太が首丁と打落しかを刃小脇よらと  
 幹竹割み破仆を後ま閃く沼太郎が刀をま受とめ足を飛くと礮と

蹴る蹴るまきく尻尾小轉輾起人とま起しもま背板楚と踏まえて  
 一壓屈と蹠躑と六目子跳出血を吐くも足を岡掛く沼太郎戲水が如く  
 死まけりもは懲まもふ三九二の中太撃殘され一六七人の悪棍を獲とく  
 掛とや柳とと焦燥声よ又勢を憑む匹夫の勇ま先途と聞とる美  
 夫のまきく怒も瞬間小三四人死まると破仆廿中太ホハ逃足踏て  
 衆皆皆一破立とまは足踏のまも程小縁類の縁踏外とく象棋倒小碁と  
 仰及落とて義秀へ血刀席薦みつ死立る大姐板を引提て縁類は跳虫盡き  
 ろる起人とま中太をま悪棍們が背骨肩腰蹴るも打狼ま壓殺ま  
 類平たる勇力小一座の悪棍数死盡とく死骸ハ算をま茶せるど當下  
 義秀ハ生血は流る姐板死骸の上小倒し俱利伽羅の大刀とるあけて  
 ろる半死半生るも水六ホが首を刎まふ鮮血を拭ひ刀とまを鞋小











會社の亦この夏はあまの御息所拒く後ろごもその意不悖にのめら。  
 殺さるるをたすめむら憂ふ漏れぬ吾們三人より送されくゆりたのく。  
 天日光入るると偏小君が神恩を思ふ下り外小婦女子今一人も結ぶぬじ。  
 としひあまを諸袖を頼み推あて伏沈え友音よよと泣くもあまの御息所嘆息し。  
 けはらるるあまの御息所憐れしくもなるぬえらるるをあれ悪規們が姓名とく  
 志するのみ一兩人後ひ来よとひひうけく又奥の房小赴けが紗燈兼塵の滅残りて  
 屍被此小横り血の流し席を染て涿鹿の野の似るあまの御息所後ひ来る。  
 加く澤楮谷のよま子をええりの俯る死骸が起しくも直と誰彼も誰と  
 曲く小回一ふ二人のまの子のあまの御息所漏れどこの名を告る程はあまの御息所遠く  
 墨斗の毫を抜出懐紙を引衣て悉く写と免先魔平太が首を刎てその  
 袖引畏く楮谷のあまの御息所しその餘の死骸の耳を刎とせらるる小紙牌を

附肉を削る針小納く加賀沢の婦人小りじみづろ紗燈を引提く。庵溜よ  
 鄰る一室よ赴き又骸どもの名を問耳取紙牌を附ると初のとくこはれぬ由  
 件の針小納く。鮎て庵溜小立え且友鶴の淡津の女子小慰きて侯てり。  
 當下あまの御息所へ婦女們小うち對ひく。汝もあまの御息所を扶掖き門外よ出てこれ  
 侯迎の驕夫由彼知へ来るえとくとしをば立ま一人の友鶴を扶引死二人の  
 魔平太が首級が携へ耳を納る針を抱く先小立り、案内せらるるあまの御息所  
 各ともおど佛経寺宝のあまの御息所と根もろくあまの御息所とる物  
 終くあるところをさへ竟小母屋小火を放く立出く見せし雲霄齊く鮮明  
 の月が昇り夜は旦三の比るるところ。あまの御息所根が莖平の被樹下小坐と  
 占て更中あまの御息所心細くあまの御息所の天をさるる仰ぎしあ  
 まの御息所程は慈航寺のうふ丁く火氣痛くと燃あがるとあまの御息所暗号は







女児を虎穴の中へ救ふ。兇賊忽ち地滅亡す。郷民安堵の多し。
   
 莫大の幸ひ。併友鶴が羊来信。地蔵井の利益。不慮の資と
   
 ぬりけん。由る。昨夜和君を送る。客の房に立。床に掛
   
 たる明玉の画像。拜もする。神前一本の白幣あり。誰かおのせ。と奴
   
 婢。向ふ。絶ゆる。地蔵の不動の本地佛。さう。ふ。の。地蔵會。
   
 彼懸物をくけ。ひ。か。る。特。示。させ。め。人。が。涙。を。流。す。
   
 る。い。へ。う。と。ゆ。り。と。妻。の。媪。も。云。云。と。告。ぐ。染。神。酒。添。を。り。神。燈。の。数。を
   
 倍。く。夫婦。神。前。へ。通。夜。する。吉。左。右。を。わ。り。つ。果。く。女。児。友。鶴。へ。送。る。
   
 歸。来。す。の。件。の。幣。を。う。せ。な。ん。と。い。ひ。け。く。老。僕。を。召。て。魔。平。太。が。首。級。と
   
 則。耳。を。次。の。房。へ。持。退。せ。判。五。を。身。を。淨。ん。と。せ。ろ。共。に。退。る。且。て。恭
   
 毛。幣。を。捧。と。す。ふ。る。ま。み。秀。へ。縁。頼。に。立。出。く。漱。丸。幣。を。両。心。不。受。と。り。て

三つに戴きて床の間の中檀にお建の退る。わ。ん。の。あ。り。あ。り。
   
 靈応ると疑ひ。某故郷のわ。ん。と。死。不。動。の。冥。助。ふ。り。て。親。の。誓。言。六。人。と
   
 一。夕。不。替。果。せ。る。ふ。昨。夜。う。り。う。り。ゆ。も。こ。ふ。宿。を。投。ぐ。あ。り。小。對。面。ま。る。ふ
   
 及び。床。に。明。玉。の。画。像。を。く。り。又。某。が。秘。藏。の。大。刀。と。俱。利。伽。羅。と。名。つ。け。り。
   
 仇を撃。毒蛇を砍。は。も。み。ま。この。刃。の。威。德。よ。し。王。給。と。い。ひ。恰。と。い。ひ。あ。じ。の
   
 ぬ。り。兇。賊。を。殺。し。息。女。を。救。ひ。と。ん。と。疑。ひ。う。と。と。と。一。人。進。く。不。測。の。功。と。る。
   
 亦奇なるま。と。と。鏡。渝。廿。六。判。五。の。信。心。弥。よ。く。感。涙。を。拭。ひ。あ。き。異。なる。と。の
   
 い。そ。が。り。さ。ふ。貴。客。の。姓。名。を。ゆ。る。の。と。い。ま。ご。本。貫。来。歴。と。う。け。の。り。を。駭。の。仇
   
 人を殺。多。い。あ。る。物。を。う。り。ま。る。は。傳。使。謙。倉。の。和。田。廷。尉。盛。下。口。乃。名
   
 劍。あり。廻。俱。利。伽。羅。と。名。つ。け。る。原。是。源。家。の。付。室。た。王。古。將。軍。幕。府。と。も。件
   
 の。廷。尉。賜。臣。と。あ。る。人。の。夜。結。る。ま。り。余。る。小。君。が。腰。刀。も。又。俱。利。伽。羅。の。名。あり。







明王の  
擁護更  
舊縁を  
引着ま



友つゆ



新五小妻



松田向判五



於いぢ













某遠く上総を去て年来當國に住ひまると。そと不審せられん固より  
 凡智驚才おれれば陶朱が富と學ぶまあり。子貢が貨殖とよく考ふあり。そ  
 越中の父母の國則先祖の本領之壯年の比故郷を離れ。且上総の僑居の  
 活業の爲めて親族の故國なまむべ之判五八則兄が名めて婦負三郷の  
 里正(うら)原是平家潛第の侍。越中二郎兵衛尉盛嗣が爲るは従弟上総  
 五郎兵衛忠光の也。ちかドちかなる氏族おれせ。父祖累代の農家よて仕  
 されは。その名咄えを平家ハ西海の波に沈淪盛嗣忠光亡びしけと。が  
 兄弟よへ崇もなく舊よ由く三郷の長とす。と國司の恩命田園世帯  
 安堵して財よ更ハ缺ねども兄判五よ子もなり。某も又子と奉む。平家世  
 ざるもありと。忠光が所縁よ就く。某ハ上総に赴記木綿乾鰯を賣買  
 ちくハ州をへて花主とす。利潤年よありと。いとも家よ不足いふと。人の

子を養ハ実子生ると俗よい。うで女の子と。とあつて安房の大瀨  
 凌江ハ如此くの赤子こそあ也。そが親ハ豊六とて貧乏れども舊家あり。  
 件の女の子を賄せぬ。と郷よ媒妁も此あり。その人と二三爺と素より  
 相識人なり。ちよバ立地よ熟談し。里方の媒妁と。二三爺ハ対面して。  
 元暦元年八月下旬襁褓の中ハ養女小蔓と上総へ迎らる。約束おれ。が  
 産の親豊六夫婦と交加せむ。あつち僅よ三年歴く。文治二年の春此比  
 某が兄稻向判五ハ時疫の病に嬰てて鍼灸茶餌の効あり。ちよバその  
 日より嫂も亦病がひて。これちむあくなう。也。故郷の信せえ。ちよバ  
 胃のち騒然哀と悼めど。その甲斐を。嫡家の断絶この時と。人ち。ひ。ね  
 ちよバかくてあつて。ちよバ。上総ハ羈旅のちよバ。あ。れ。家産と。ちよ。妻。子。と  
 速に故郷へ還りて。兄が家督を兼嗣せし。との通稱なり。ちよ。番。と



更めて。稻向判五とちりうう。親兄不及びびも里人小憎まは一家おんく  
 繁昌せう。この比り養女小蔓と友鶴と味くそく堂の縁。時の花と愛  
 慈之育る隨心標いと優く孝行もたかくなれば容止さへ傳稀あつ少女  
 小なうせう。つらくかへ人の子と産のふと欺くこと愛するは似く心  
 陝う。実のふも不孝あり。養ひ子も至孝あり。匿果人の罪ありとい  
 つたぐり雲時ぬほほと竊は妻とも相譚ひ文思を召て云と説諦せし  
 渠が年。十三の秋なうた友鶴は養女あり。ちめて知てうち驚き且愧  
 ころおもちあてよ。親の恩むらも。喻る物信ねと。とれて強裸の中ひて  
 養ひとられまじ。まへる産の母実の父は弥まて。おん慈とぬえれば  
 口つまでも血をまけあふ父母とこそひまれ。とふもかかちも二輕の隔絶て  
 侍らぬ。雖然垂乳母のその胎内と十月が間苦うう久産の思あきま  
 あらぬ倫ひは侍り生涯あつた。かた二親も恙なく百歳まで  
 めと願言の。つら道つ舊里の。そへ西や東や。あつたばををあま  
 なう。とそあつて音なくとも甲斐あつた。まは侍り。とぞうう答て  
 そのち安房の安文字といひまは孝行下し。不真成よ。不隔らま  
 せえむ。この比りして友鶴は地藏尊寺の本尊と殊さう信どま。毎日  
 續經怠らぬ。祈願の筋を告ねども。存や亡やも定うならぬ産の親は二世  
 安樂養父母の。あま。この大願を覆せし。なんとも。憑く親  
 ちうりた孝女と。まは。この大功徳空うう。去歳の秋。三爺がおごう  
 せ。舊里の。詳にせえ。豊六夫婦の死去。道世和君が孝行。復讐の  
 その顛末を今も。あまよく知つことを。されば和君と母の  
 往方。いふくと想像は。友鶴が心の裏。量もつ痛ましく。せうく

あつた。かた二親も恙なく百歳まで  
 めと願言の。つら道つ舊里の。そへ西や東や。あつたばををあま  
 なう。とそあつて音なくとも甲斐あつた。まは侍り。とぞうう答て  
 そのち安房の安文字といひまは孝行下し。不真成よ。不隔らま  
 せえむ。この比りして友鶴は地藏尊寺の本尊と殊さう信どま。毎日  
 續經怠らぬ。祈願の筋を告ねども。存や亡やも定うならぬ産の親は二世  
 安樂養父母の。あま。この大願を覆せし。なんとも。憑く親  
 ちうりた孝女と。まは。この大功徳空うう。去歳の秋。三爺がおごう  
 せ。舊里の。詳にせえ。豊六夫婦の死去。道世和君が孝行。復讐の  
 その顛末を今も。あまよく知つことを。されば和君と母の  
 往方。いふくと想像は。友鶴が心の裏。量もつ痛ましく。せうく







一三ハ好くと恋あへど。ち咳起て小膝を進め。阿三どの目今や。如し。  
 あつどの翁ハ豊六夫婦ハ大なるな。ぬ恩義あり。言をよ。縁談を  
 和殿否といひし。媒ハ一三也。これも否といひし。さ。うけ引と  
 せむれ。秀で。親を改め。定ふ。あつどの好意。款く。い。の。後。の。ハ  
 うけ引。と。い。は。せ。も。果。然。と。い。う。ゆ。結。れ。ハ。莞。尔。と。う。ち。微。笑。縦。骨。肉。を。吐  
 とも。友。鶴。ど。の。実。の。親。ハ。某。小。も。亦。親。之。既。ま。の。親。お。を。り。た。時。ハ。彼。と。此。ハ  
 兄弟。な。り。ゆ。や。この。婚。縁。ハ。兼。引。じ。と。推。辞。ハ。一。三。頭。と。う。ち。掉。毛。ハ。あ。く  
 それ。ハ。僻。言。之。和。殿。親。子。が。別。り。と。死。母。内。の。教。訓。長。物。語。と。い。ひ。あ。り。小  
 竊。受。て。え。れ。その。原。を。既。ま。ある。葉。子。ハ。和。殿。が。乳。母。豊。六。乳。母。の。夫。主。從  
 小。して。親。子。よ。あ。ら。と。彼。葉。子。が。教。育。を。和。殿。ハ。何。と。ぞ。や。さ。き。で。も  
 世。小。ハ。塔。養。子。養。子。妻。と。い。ふ。と。あ。り。その。親。ハ。お。や。と。い。ふ。と。も。骨。肉。あ。ら。ぬ。

塔といひ又養子ともいふ。あ。く。ゆ。や。忌。諱。論。より。な。れ。今。中。も。あ。れ  
 和。殿。が。多。く。和。田。廷。尉。義。盛。の。と。い。ふ。を。義。秀。を。抗。く。推。禁。れ。ば。う。ち  
 笑。ひ。ひ。た。た。る。ハ。い。ふ。も。う。い。は。ぬ。る。ハ。い。ぬ。之。和。殿。が。素。姓。と。云。云。と。よ。く。知。る。も  
 評。別。の。夜。圖。ら。ぬ。も。竊。受。せ。一。三。が。外。絶。く。也。義。盛。の。勤。當。免。り。て。  
 鎌。倉。一。帰。り。ぬ。和。殿。ハ。誰。と。親。子。と。や。あ。つ。も。先。祖。ハ。伊。勢。平。氏。越。中。二。郎  
 兵。衛。盛。嗣。の。親。族。な。れ。ハ。舅。小。して。さ。ぐ。り。く。は。是。彼。の。の。て。良。縁。と。い。ひ。引  
 め。と。棟。石。ハ。秀。で。を。又。死。沈。吟。ト。て。応。せ。具。ト。て。頭。を。擡。教。ら。る。と  
 緯。の。趣。み。を。理。り。し。覚。れ。ハ。今。ハ。脱。る。路。も。な。し。ま。う。ハ。あ。れ。ぬ。某。ハ。親。ハ。勤。當  
 か。は。許。さ。れ。ぬ。世。ハ。浮。萍。の。浪。人。な。り。妻。を。娶。り。子。を。産。む。後。の。栄。を。願。ん。や  
 一。世。の。勇。を。輝。し。國。家。の。為。身。を。殺。し。て。美。名。を。未。世。に。留。め。と。い。ふ。外。ハ。能  
 ら。の。淺。を。う。免。し。ぬ。と。再。三。ハ。推。辞。あ。ら。判。五。ハ。是。小。も。後。に。朝。夷。好。を



和田殿のちん子とハ多ひもかけ鳴乎ある婚縁慚愧も堪ど現俱利迦羅の  
 一カ八向いでも由来歴くる名家の子孫と嘆くと死ハもく己ご死おひ  
 あり。願六女兒友鶴を産じとも側室としておん子を産せあつて是某が  
 嫡孫とてとて家を嗣せん某今茲五十六歳頭ハ既白くおれも筋骨ハ  
 多ほ健之幸小して上壽をたもつ孫が生育んざらんやかくの如くある死ハ  
 和君は妻なく。側室あり。子ありといふもな死が如く。かくてもうけ  
 むいむと。辞と盡せば妻も又繰返し。復々うし。一三共侶口説は  
 義秀もいも嘆息し。あハ郡を婦負といふ。婦負ハ則婦女長負之妻ハ  
 義秀が。あハ脱れぬ名詮自性歎子のあうなハ人力のよくなる  
 人の情ありといハ。某下野の足利は旅宿せ一日信ある友二人をゆるり別  
 と死よ来春ハい由死く問んと約束せり。又その里を過じりハ亦彼友の  
 紹介也。加賀國石川郡小松の郷なる莊官が子ハ佐味竺内高利とい  
 此の家とあじとせん為あり死がて今幸ハあハ縁者の資をばし。佐味  
 憑む及びつども。彼死ハい由死く對面。云云と佐味ハ告げられ一言の  
 約ハ背死て友ハ信を失ふ。かきバ久くこの死ハ當りてうもあハ死ハ  
 判五ふも高利春ハもなハ下野へ赴死あすも妨なし。但彼加賀ハ  
 今ハ小松の郷とて。彼人蹴鞠をよむること。京鎌倉表に新將軍頼家  
 近屬蹴鞠を好まむハ件ハ佐味竺内を鎌倉へ召よめて近習の後加  
 又竺内ハ親莊官ハ今年ハ夏頭死して。怪あるもの職を嗣ぬ彼死ハ赴死  
 その益あり死とならねも。遠くもあハぬ地方あり。遊歴の為なるハ赴  
 死ハ可竺内ハ逢がらん。いよして義秀も驚死もあハ死く彼人を

和君は妻なく。側室あり。子ありといふもな死が如く。かくてもうけ  
 むいむと。辞と盡せば妻も又繰返し。復々うし。一三共侶口説は  
 義秀もいも嘆息し。あハ郡を婦負といふ。婦負ハ則婦女長負之妻ハ  
 義秀が。あハ脱れぬ名詮自性歎子のあうなハ人力のよくなる  
 人の情ありといハ。某下野の足利は旅宿せ一日信ある友二人をゆるり別  
 と死よ来春ハい由死く問んと約束せり。又その里を過じりハ亦彼友の  
 紹介也。加賀國石川郡小松の郷なる莊官が子ハ佐味竺内高利とい  
 此の家とあじとせん為あり死がて今幸ハあハ縁者の資をばし。佐味  
 憑む及びつども。彼死ハい由死く對面。云云と佐味ハ告げられ一言の  
 約ハ背死て友ハ信を失ふ。かきバ久くこの死ハ當りてうもあハ死ハ  
 判五ふも高利春ハもなハ下野へ赴死あすも妨なし。但彼加賀ハ  
 今ハ小松の郷とて。彼人蹴鞠をよむること。京鎌倉表に新將軍頼家  
 近屬蹴鞠を好まむハ件ハ佐味竺内を鎌倉へ召よめて近習の後加  
 又竺内ハ親莊官ハ今年ハ夏頭死して。怪あるもの職を嗣ぬ彼死ハ赴死  
 その益あり死とならねも。遠くもあハぬ地方あり。遊歴の為なるハ赴  
 死ハ可竺内ハ逢がらん。いよして義秀も驚死もあハ死く彼人を



心あてよ小松白六進退究つじは舊藏縁者とあは逢ひしはもくも  
 幸ひさきも傳へてのまゝはひと疑ふ所あり。疑ふはひもその人の  
 宿所ともえんやとあひせざるに紹介の書状ある故之急ぐたとせねる。  
 うち捨ておたがはし。とあは判五ハ感嘆し寔に和君ハ信茂ハ篤し。幸のこ  
 一とあ某共侶は加賀は赴地一ツ小笠内ハ宿所ハ案内一ツ小富樫殿へ  
 兇賊退治の趣を折々首級実檢小使へその折和君ハ介殿富樫ハ對面して  
 勇敢武略の爲体且和田殿の御子なるや。明地ハ告なるは輝鎌倉小  
 上達して召出さるゝとあへんと更し種を旋まらるゝこの後ハと真とあへく  
 向ハ美秀頭をうち掉し。や鳥合の山賊們十人廿人替うると功名を  
 せよ足らぬかむうの小事をめて恩賞を乞ひ帰糸をねがふが愧る  
 所ハ美秀が爲を乞ひぬる。魔平太が首級を富樫へ送らぬこのころ

披露をよめた時。到らバ功と名とおのづから顯もて。君父ハ見奉る目わら  
 懇よ素姓をあらはれて親と一辱をわらバ信と恨をもうさる。辭儀く  
 禁一ハ判五ハさうなる一三ハ顔ちありと嘆賞。吾們草野の知人  
 なるハ絶て勇士の本意を知れ。とあゆかむもいつも隨よその意ハ情  
 とはな友鶴がむらげり多と。又他更もあて賠償一ハ美秀ややく  
 点際目今示しあうせ。如く一所不住の塔とあう。結ぶ縁一なるハ  
 推辞ハ辭もいも退却て息女中よこのあろをほさ。あはけそ早持  
 ゆをあらじ。大丈夫の一言ハ駟も及ぬものを某おいて變改や。と愉く縁  
 うハ衆皆大知ハ飲びく。壽を述べ更ハ益を巡じつ。その暎昏ハ席を巻地  
 稍盃盤を納めたり。園宅食疲勞よる。甲夜よりそく臥つ。定津猪谷  
 加賀澤ハ豫く輝の趣を知らせる。却説次の日。彼三郷の里ハ判五が



宿所は詣来つ。恩を謝し。歎びを述彼。某甲が女見。これハ某の妻  
 とし。義秀が婦て。婦女們を乞う。人目も羞む抱くもあ。或ハ身を  
 とめて泣く。これとて。又笑ふもあ。酔るが如く。醒るが如く。哀む如く  
 歎び。且く。七里人。亦もろ。歩目。を拭ひ。命達。いよ。あや。人當國の  
 立山。ハ。その。せ。なる。地獄。あり。件。の。山。は。龍。の。死。亡。者。逢。せ。せ。い。い。い。  
 定。る。な。る。鬼。ハ。平。く。鬼。ハ。捉。ま。そ。細。の。山。一。逐。菟。れ。あ。あ。と。と。死。妻。女。見。が。  
 甦。く。還。る。あ。あ。な。死。生。い。と。有。く。死。る。な。ら。ば。や。と。人。ハ。皆。占。取。  
 淨土。山。の。佛。の。心。も。及。び。ぬ。と。諦。や。ん。弥陀。ハ。則。朝。日。奈。ぬ。あ。の。ま。出。現。  
 志。み。ひ。で。救。ひ。と。を。あ。ひ。と。よ。その。恩。德。を。忘。ま。な。し。と。誓。し。く。礼。拜。し。會。  
 伴。く。退。け。け。を。され。い。の。う。彼。此。ハ。隠。れ。なく。婦。員。新。川。射。水。砥。並。  
 九。四。郡。の。良。賤。士。庶。故。と。限。ま。り。貧。死。衣。を。售。て。家。は。置。酒。慶。賀。し。  
 近。死。ハ。勇。士。と。お。う。ま。ん。と。也。菖。草。を。餽。し。名。簿。を。投。ぐ。判。五。が。宿。所。群。集。  
 せ。あ。い。も。義。秀。ハ。物。望。も。あ。ま。と。受。む。況。對。面。せ。る。と。は。い。こ。う。か  
 沙。汰。せ。と。口。を。餌。め。せ。せ。い。も。ま。も。く。稱。噴。し。て。名。ハ。お。の。づ。ろ。波。糸。  
 多。か。ら。え。れ。も。稻。向。判。五。ハ。義。秀。ハ。禁。め。られ。く。件。の。締。の。赴。を。富。樫。介。に  
 訴。む。魔。平。太。が。首。級。と。刎。耳。と。バ。地藏。尊。寺。の。側。に。埋。ま。せ。夫。婦。ハ  
 本。堂。へ。糸。詣。し。て。沙。金。十。兩。を。獻。じ。友。鶴。義。秀。が。る。真。福。と。祈。る  
 と。他。更。なる。と。う。兇。徒。の。二。條。果。し。く。あ。つ。夫。婦。ハ。更。ハ。三。と。相。謀。て  
 黃。道。吉。日。を。と。つ。友。鶴。を。り。て。義。秀。が。側。室。と。正。し。く。夫。婦。と。唱。後  
 ども。婚。姻。の。規。式。形。の。と。く。と。行。ひ。一。家。の。歎。び。疆。た。く。百。年。の。契。を  
 濃。之。洞。房。花。燭。夜。を。連。綿。て。男。女。の。間。疎。く。せ。盧。生。が。枕。覺。と。死  
 なく。槐。安。の。樂。之。竭。ら。た。あ。じ。と。ん。え。く。と。め。じ。か。く。と。や。衣。を









月長一冊末二



と 腰 義 羅 俱  
観 の 秀 山 利  
る 怪 罽 伽

おひる

草 東 二 冊 卷 三

〇 〇



後人蛇足附余て三十六地獄の名を負し愚者婦人と感懲て錢を  
 呂の四とを地獄の制度も金といふ鄙詰いどちたやとむりごとくても  
 足をも用の旅の日を費して妻子小物をいせえぶらぬ所をこ有撃ふ  
 めいふものうらうらうかたさか途とて越中國礪波郡俱利伽羅山と  
 過る小なるこの地は加越の封疆小していぬ壽永二年五月十日木曾冠者  
 兼仲朝臣平家の大軍小うち捷て数万騎を黑坂の南谷追落し贖敵將  
 知度為盛貞康ホを悉奪らるる地方なり嶺と宇の道場あり昔  
 越の大徳の山よけ登て千歳瀧は身を撲して俱利伽羅明王の  
 秘法と行ひひひる瀧より神龍ありしく大徳を守護せむとせしめて  
 この心も俱利伽羅嶽といふ松水小矢部柳原笠野富田竹小橋  
 みるみるは相並ぶ源平當時の戦場なり美秀らの岑を踰るは日  
 暮夕にして風層を犯し道と遠して人既疲れら直下せば深谷地を  
 帯りて烽火青苔の巖より閃地向よまば高嶺天を横りて遊魂暮雲の  
 中より呻み離るる路傍の草は花は紅かりて戦死の鮮血は凍るごとく  
 墨くろく谷陰の白骨は半朽く老松怪松を肥せ移るもろのあり磯の  
 浪なると碎く後名あり亡父の智畧一世の英雄の俱利伽羅の嶽  
 ありの高地歎憤今あり迹認ゆる古戦の分野栄枯得失一叢の烟と  
 多しを墓なり哀うをむらうとちてゆらぬゆる谷底を直下し立む  
 打く忽地夕霧立ちあて其処もろぬ谷の中より数万騎の陣は声  
 曳く咄と復動して具鉦の音馬鑣の音矢叫び太刀怒凄しく侍陣  
 として合戦の場はその身を置ごとく毛骨のまらちをたれども美秀の海  
 立もはも睨詰る折しあれ颯と吹揚る風と共に胃のあさるる花をよれ



あり。拂ひのあむ合はあそ。いさぶ人の觸腰なる。嗚乎なるのよと取あはして。  
そがも谷(捨人)とまきば後のこよ声あて三郎ぬしくと両三声喚うけり。  
こが名をまきる。什麼誰也。と問あむ信とえりまき。五尺あま地と去はく。  
直躬と立ち武者一騎白地の錦の鎧直垂。白精好の奴袴と張せ。白系  
威の鎧穿し。白星の兜と戴た。廿四差なる白羽の矢と。苦高は負なり。  
白木の弓と小腋は握く。白馬は白鞍置て水色の厚總と掛。あそち騎  
る。現もの纏の為体。この陽人ともんえきま。美秀ハ又向答せ。間近く  
よ。六七切をりんと。刀の鞘はまをうけり。疾視あてを立ちりる。

朝夷巡嶋記全傳第二編卷之三終

續皇朝戰畧篇

全五冊

照陽高見先生著

此書正編ノ五三行ハル。丁久シク且盛ナリ。而最近世ノ戰畧ニ於テハ既ニ卷アリ。紙數充リコ  
以テ記スル。丁能ハス。故ニ今般先生ニ乞ヒ新ニ統編ヲ發見スル。西ニ其記載スルヤ文化  
年間。魯西亞人蝦夷地ニ入寇スルニ始マリ。尔來大和長防又西東。戰ヒ王師東征。尋テ佐  
賀台灣ノ諸役及ヒ朝鮮江華島ノ捷ニ終リ。其大ニ諸戰智將勇士ノ奇勳偉功ヲ  
減ス。無シ。即チ兵家必讀ノ書タルハ言ヲ俟タズ。今日開明文化。由テ興ルニ。所以スル者  
マタ戰ヒニ出レハ。人ノ尊卑ヲ問ハス。有志者ハ此書ヲ閱セサル可ラス。四方君子。幸ニ購求シテ  
其奇書タルヲ知リ。玉ヘト云フ

大坂書肆

文榮堂

前川源七郎謹白

右書各府縣下普々書林へ輸出有之。以間御手寄ニテ御購求下サレ度ハ



